
オイスターソース

月路 奈美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オイスターソース

【Nコード】

N1458D

【作者名】

月路 奈美

【あらすじ】

港町のバーテン、ラカは「待っててくれ」という友人イスターの言葉を信じて十六年間彼を待ち続ける。久々にやってきたイスターだが、何か様子がおかしい。（ギャグ系も入れる予定）魔法が飛び交う（予定）ドタバタファンタジー

第一話・嵐の夜のバー（前書き）

ギャグあり、感動ありの予定ですが・・・。どうか最後まで「つまらない」などと言わずに読んでくだされば幸いです。

第一話・嵐の夜のバー

その日は、雨と寒風が吹き荒れるさびしい日だった。辺りは漆黒の闇に覆われ、おまけにずぶぬれで、行きかう人々も天気と同じ表情だった。つまり、曇っていたのだ。

港町というものは、晴れていれば楽しい場所なのに今日はあいにくの雨だった。

しかし、店はもちろん開いている。こんな日には酒場にでもいつて仲間と飲み交わそう、とほとんどの住民が思っていた。そのため今日は早めに仕事を終わらせようとするが、冷たい雨に指がかじかんでいた。

それでも仕事を終わらせた者は、自分のお決まりの酒場に向かった。

その中でも最も常連が多かったのは、唯一女性の経営する、「マヤ・ノット・バー」だった。バーテンはラカといい、落ち着いた物腰のカクテル作りの天才でもある。

夕方はいつも混んでいるマヤ・ノット・バーだが、今日は客が一人も出て行かないため、狭いバーに人が密集していた。ラカはこのバーをたった一人で経営していたため、大忙しの引っぱりだこだった。

店内で賭けをする者、ビールをすすめる者、ワイングラスを揺らしながら大人の話をするもの、と皆それぞれの場所に落ち着いていた。しかし、何かが違った。誰も違いには気付かなかったが、確かにそれは存在していた。

第二話・再会

バーテン・ラカには生まれつきの予知能力があった。それは夢の中でしか感じる事ができなかったが、恐ろしく正確だった。

昨日の夜、ラカは枕に頭をつけた瞬間に寝てしまった。

夢の中でラカは居心地の良い丘の上に立っていた。辺りは暖かく、蜜蜂が飛び回り、柔らかい草が生えていた。日当たりも良くて、思わず昼寝をしたくなってしまふ。

しかし、あくびをした時に気付いた。何かが足りないことに。ラカは首を傾げた。

近くに川が流れている…。足りないのは水ではない。生き物でも、太陽でも、ましてや雲ですらもない。じゃあ、もっと身近で、無意識のうちに感じているもの…。

「あ…」ラカは思わず呟く

「風が、無い」と。

丘には風がそよとも吹いていなかった。そして、風が吹いていないのに何か緑色のものがひらひらと顔にかかった。わずかな磯の香り。これは

「青…のり…？じゃあ、これは…」

ふとラカの脳裏に浮かんだのは、4年前に旅立った友人の面影だった。

「…さん、ラカねえさん？」

ラカは常連客の一人の声で我に返った。

（まさか…ね）

「どうかしたのかい？」ラカを正気づかせた客は心配そうだ。

バーテンは無理やり笑顔を作って接客した。

「いえ、何でも無いわ」

「それならいいがね。可愛いラカちゃんに何かあったら町の男が放っておかないだろうからな」

誰かが口を挟む。

時計が8時を指した。外は真っ暗だ。

その時、新たな客が入ってきて、こんな時間にと怪訝そうな顔をする客を通り過ぎて残っていた一つの席をとった。

バーは静まり返る。黒いフードをすっぽり被っているため、新入りの顔は見えなかった。

しかし、沈黙も新入りの「カクテル、きついのを頼む」という声で緩み、酒場はまたにぎやかになった。

しかし、バーテン・ラカは顔色を変えた。

「その声…まさかあんたはイスター？」

客とラカは周りから完全に遮断された。客はゆっくりと顔を上げ、フードをとった。

フードの下から長い金髪が零れ落ち、整った顔立ちと、海のような目があらわれた。

「久しぶりだな」

第三話・そして彼は旅立つ

気まずいわずかな沈黙の後、ラカの会いたかった、というストリートな一言が二人の間の話しくさを消し去った。

そして、友人同士の過去話などを酒を飲みながら語り合った。しかしラカは、妙な違和感を感じていた。

「私のカクテル、上達したと思わない？」ラカは違和感を打ち消そうとするように言った。

「そうだな。カクテルは昔からお前の得意技だったよな？」

「うん。これからもっと上達するから、またここに寄ってよ」

イスターが悲しげな微笑を浮かべ、ラカは違和感の正体を知った。動揺して、目が丸くなる。

物憂げな微笑など、イスターは一度も見せたことが無かったからだ。

「な…その顔は何！ちゃんと帰ってきなさいって言っただけよ！」
気持ちとは正反対の強い口調。

「うん…ラカ、その約束、守るのは無理かもしれない」

「何で？」

答えるイスターの口調は悲しげだった。

「オレだってラカにまた会いたいし、美味しいカクテルを飲んでみたい。でも…」

「でも?!」

イスターは答えない。ラカは苛立った。

「ちゃんと答えて!!」

彼はしぶしぶ口を開く。

「この国が西のルイ・デン公国と戦争してるのは知ってるだろう」

「ええ。ルイ・デンとティグリアの西南戦争なら、こっちにも被害がでてるから」

「ここ（ティグリア）の主力の魔術師ルーフルが暗殺されたのは

知っているか？」

淡々とした口調で言うイスター。

「え？あの天才魔術師ルーフル・アル＝カリストが？」

ラカは目を丸くした。

「ああ。ここまで言えば分かるよな」

「つまり…イスターが代わりに選ばれたってことだね」

ラカの気持ちは沈んだ。

（久々に会えたのに…）

「んじゃ、もうオレいくわ」

何事も無かったかのように立ち上がる姿も、今のラカには痛々しく思えた。

「……よ」

バーの中が再び静まり返り、ドアに手をかけていたイスターが振り返り向いた。

「ん？」

「帰って来てよ」

彼は人の目が集まる中、頭をかいてから

「おう。どんな形でもいいから、帰って来る。だから、お前も待つてろよな」

と言いつつ残して出て行った。

ラカは泣き崩れた。

それから16年後、この港町で一つの奇跡が起こる。

第三話・そして彼は旅立つ（後書き）

第四話・時は流れ

ラカがイスターの言葉を信じて16年が経った。

彼は一向に戻る兆しがない。

ラカはイスターを待つ間に数え切れないほどついたため息をまたしても吐き出した。本当に約束を果たすのだろうか、あの時ただ単に自分を安心させるための嘘だったのではないか、という気持ちが強くなってきていた。

それでも、待った。イスターに関係がありそうな情報には飛びついたし、時には彼の姿が無いが港の辺りをぶらぶらしていたこともあった。仕事を放り出してでも。

それでもイスターは戻ってこない。

「ラカちゃんの彼、早く見つかるといいわねえ」店番を頼まれた客が呟いた。

「いや、僕としては見つからない方がいいかも」その相棒が自分に語りかけるように言う。

「あら、あんた妬いてるでしょう」

実は店番をしている二人は親子だが、まるで似ていない。銀色の髪少年は顔を赤らめた。母親の温かい顔と正反対のいわゆる美形顔が、ほんのりと赤くなる。

「い、いや僕は今日もラカさんが探しにいつちゃってるし、何ていうか、その、いやっ、年とかとか全然違うし、結婚とかは無理だけど」

母親の凶星な発言を慌てて否定しようとする少年は、逆に本心を漏らしてしまった。

「クスッ。あゝ面白い」

「……わ」

「…加減に…」

「うわ~~~~っ!!」

「降参しろ!」

恋する少年とそれを茶化す母親が番をしているマヤ・ノット・バ
ーかだいぶ離れた広場に、大勢の人が集まっていた。

原因は、広場の中央で大喧嘩が起こっているせいだった。何しろ、
激しさが尋常ではない。

「あや…まれ〜ッ!!」喧嘩中の一人が怒鳴った。喧嘩といっ
ても一方的で、今怒鳴った方が圧倒的に強かったのだが。

「う…梅干ぐらいでっ、ぐはっ」負けている方が「ぐらいで」の
で言った時、もう一方が相手を思い切り蹴った。

「ぐらいで、ってなんだ〜!!梅干を侮辱するな!!」

「ぐう…姉貴い、可愛い弟のためにちよっとは手加減でもんを」

「五月蠅い!!お前は弟だが決して可愛くは無いぞ!!だいたい
年頃の男がそんなに髪長くするか、オカマが!!」

確かに負けている方は長髪だった。

その時、二人のどちらかの攻撃の衝撃波で広場の石像が吹っ飛ん
だ。

「ああ…エンジェリックストーンが…」観客(?)の一人が叫ん
だ。

空中に舞い上がった時、かすかに少女の面影が確認できた。しか
し、落ちて砕けた。

もつともその原因である二人はまったく気にも留めない。

その時、ラカは広場をずっとそれた所を歩いていた。自分のお決
まりの店に行くためだ。

「いらっしやい」慣れた声に、気持ちが和んだ。

中で買い物を済ませた後、毎日のやり取りでもあったイスターの
消息についてを聞いた。

「いや、相変わらずそんな人は見かけないよ。それよりか、広場

の喧嘩。ありやあすごいねえ」

ラカは興味など無かったが、聞かないのも悪いと思った。

「何のことですか？」

「おや、聞いていないのかい？ 広場でね、一組の男女が喧嘩して
いるんだそうだよ。たいそうな金髪の美形らしいがねえ。あ、その
うち一人が、『青のり…』とか言いながら寝てしまったらしくて
おや、ラカちゃんどこ行くんだい？」

ラカが決意したような顔で立ち上がったため、店主は呼び止めよ
うとする。

しかし、そんな声は今のラカには届かなかった。

ラカの頭に浮かんでいたのは唯一つ、長髪の、青のり好きなイス
ターの寝顔だった。

第五話・再会の衝撃（前書き）

一部修正いたしました。（――）細かいところです

第五話・再会の衝撃

はあっ…はあっ…

広場に着いたところには、ラカは倒れそうになっていた。港町の広さを身をもって感じたからだ。無駄に広い、とラカは思い、眉根を寄せる。

後は、話された通りだった。

人が輪をつくって中心の一点を見ている。何事が囁いてはいるのだが、誰も近づこうとはしなかった。

そしてその周辺は 美しい広場の面影すらなかった。周辺の木々は折れ、噴水の石は崩れ、さらには平和の象徴であるエンジェリックスストーンと呼ばれる少女の像が、粉碎されていた。

（やっぱり。イスターの魔法だ）

そう確信したラカは、人込みを掻き分けてひたすら中央を目指した。

そこに見えたのは そこで何事も無かったかのように寝ているのは、紛れもなくイスターだった。額にかかる金髪が、風を受けて揺れていて、まるで時を超えたかのように、安心しきった子供っぽい顔だった。

（イスター…。ほんとに懐かしい寝顔）

そこでラカの疑問が頭の中でなり響いた。

（今までどこに行ってたの？戦争は5年も前に終わっているのに）

（イスター・アルーディ・カーミューラー！）

感慨にふけるラカが間近にいるとは露知らず、彼は目を覚ました（何て言えばいいんだろう）

そして、また寝た。ラカの心に風が吹きぬけた瞬間だった。

「・・・」

周りの人の視線が痛かった。間違いないでしゃばりだと思われる

いるのだろつ。

顔が赤くなるのが自分でも分かった。今すぐここから立ち去りたい気持ちと、イスターをひっぱたきたい気持ちが互角だった。

彼は一度寝てしまえば、蹴飛ばそうが突き落とそうが3時間は絶対に起きない。唯一つの手を除いては。

サラッ

周りの観客にはイスターの反射神経がいかにか良かわかった。サラッのさの字が聞こえるか聞こえないかのうちに、ラカの出したものはイスターの手にあった。

そして、一瞬起きた彼がまた意識を閉ざそうとする直前、ラカがそれを思い切り引っ張った。ぼん、という音を立てて青のりのびんのふたが外れた。

「ッ?!」にすんだ!」イスターがぱつと目を開いた。

その声にラカの手の力が緩んだ。彼の声はラカの記憶の中より高く、響かなかった。まるで女の子だ。

「イスター?」放心したような自分の声。

その力ない問いかけに、イスターの目の焦点があった。次の言葉はラカの心を打ちのめすには十分な効果があった。

「ほえ? あんた、誰?」

第六話・身内登場

ラカの脳がイスターの言葉を解読するまで、数秒の間があった。

「え、い、今何て言った？」

彼の声が頭の中で何度も繰り返される。そして、同じことが目の前のイスターの口から聞こえた。

「あんた、誰？」

わずかなためらいの後、また言葉を紡ぐ。

「だいたい、初対面のあんたが何でオレの名前を知ってるんだい？それに、知ってるにしてもいきなり呼び捨ては普通ないでしょ。

ソースさん、とかイスター・アルデー・ソースさん、とかそうやって呼ぶもんじゃ」

「ソース？」ラカはオウム返しに言った。

「ん？名字を知らなかったのかい？」

「イスター・アルデー・カーミュラじゃないの？」

「誰だ、それ。オレはソースだぞ。人違いじゃないか」

ドスツという鈍い音。振り向くと、短い金髪の美女が気絶したイスターを踏んでいた。イスターと同じ青い目で、彼を睨みつけながら。

「こんの……くそ馬鹿！！知らない人には敬語で話せと何度言ったら分かるんだ！！」

そして、啞然とするラカの方を向いて一言。

「すいません。この、馬鹿たれ・エロ・ウザ・間抜け・長髪おかま弟野郎の態度が悪くて」よくもいっぺんに話せるな。思わず感心してしまう自分に気付くラカだった。しかし、最後の方の一言が気になる。

「弟？」

「はい。長髪ですが女じゃありませんよ」

「あ、男だというのは知ってます。そうじゃなくて、あの……」言

にくい質問。美女の顔には明らかに怒りマークが浮かんでいた。

「の？」

後で知ったことだが、彼女が辛抱強く相手の話を聞くなど（しかも敬語で）何か裏があるときぐらいしかなかった。

「私の知り合いに同じ名のそっくりな人がいるんです。だから」

「あらあ、それは奇遇ですこと。でも私達は貴方なんて見たことありませんよ。あ、失礼しました。私はこの馬鹿の姉オイサイリア・ウィン・ソースと言います」

本人にとってはただの自己紹介なのだろうが、ラカにはものすごく重い言葉だった。

（おねえさん…ほんとに…じゃあ、私の目の前にいるイスターは別人なの…？）

第七話・なかなか進まない会話

その日の夜は、無理矢理ソース姉弟を引きとめ、自分の家に泊まってくれるよう頼み込んだ。最初は首を横に振っていたオイサイリアだが、ラカの「知り合いにそっくり」発言に（かなり悩んだあげく）ついに折れた。

マヤ・ノット・バー二階

ラカが風呂から上がってオイサイリアも入浴するように告げようと彼女の部屋の扉を叩こうとした時だった。中から二人の声が聞こえた。

「あ、来た来た」扉越しにイスターが声をあげた。
何故分かるのだろっ、とラカが思うと同時にオイサイリアが自分を呼んだ。

「話したいことがあるので、中に入って来てください」
部屋に踏み入ると、二人が真剣な顔でこちらを見ている。ラカは緊張した。

「ラカさん、こいつ（イスター）は、昔から勘が強いんです」
オイサイリアが唐突に話し始めた。少し当惑しつつも、ラカは頷く。そうしながらも視線は壁にかかったアジサイの絵の辺りをさまよっていた。

「それで、イスターがきつと言っても平気だ、オレの勘が言ってるって、そう言ってきたので、二人で相談した結果ラカさんに協力者になってもらおうってことで一致したんです」

ラカは固くなりながら問う。

「何の、ですか？」

この話がどういう展開になるかなど、まったく予想もできない。皆あれこれ考えて、誰も何も言わなかった。

イスターが沈黙に耐えかねて口を開いた。

「姉貴い、演説（？）は下手なんだからちよっとはオレにも喋ら

せてく」

「黙れ」

どうやらソース姉弟において、常に強い立場にあるのはオイサイリアらしかった。

思わずラカは噴出した。口元に手を当てる。

「な、何ですか？」

今度は逆に姉弟が当惑した。

ラカはそれには答えられなかった。あのイスターが、姉の尻に敷かれてるところを見る日が来るなどと、誰が予想できただろう。と、笑いながら考える。かつて【魔王】とまで呼ばれ、この大陸の二つの国双方から畏怖され、暴風に例えられた青年が、こんな惨めな姿をさらそうとは、誰が

（あ、そうか違うんだ）

思い出しても笑いは止まらなかった。それは半ば発作に近かった。いつも意地っ張りでプライドの高かった彼とそっくりな少年が易々と女に屈しているのだ。

約5分後。ようやく笑いがとまる。彼女の爆笑の理由は、事情を知っていた人でも恐らく理解できないはずだ。

「すいません。知り合いのことを思い出してしまつて…」

顔を上げてみて見えたオイサイリアの頬には各一個ずつ、合計二個の怒りマークが浮かび上がっていた。

「えーと、なんでしたっけ」ラカは大慌てで切り出す。

黙りこんでいるオイサイリア。作り笑いをするイスター。非常に危ない状況だった。

しばし白けた後、イスターは自分がこの場を仕切り直さなくてはいけないことに気付いた。

「え、とつまりはですね。簡潔に言えば」

女二人は確かに簡潔な話を望んでいたのだが…

「オレが断罪者つてことなんですよ」

彼の場合、簡潔すぎた。

第八話・歴史の解説

断罪者。それは、三人が今しがた立っている大陸においては全ての国を揺るがす存在だった。

国といっても、宗教派のエアールか、無宗教派のセトラの二つしかないのだが。

エアールは、エノアラ神という女神を絶対なる唯一神と考え、自分達人間は彼女の最初の創造物だと思っている国だ。エアールの住民は全て人間で、怪物達の他、少しでも普通の人間と異なるところがある者には皆、虐殺、追放を行ってきたのだという。さらに恐ろしいことに、死や過ちに恐怖を抱く人々が団結して始めた宗教ので、エノアラが実在するか定かではないというのに彼女を心から信じていた。善人も、悪人も。

もう一方のセトラは、エアールから追い出された荒くれ者が多いうえ、大地が豊かとはとてもいえない状態だったため、絵に描いたような無法地帯だった。通り魔や裏取引はかるうじて無かったが、道端の殴り合いや、食べ物を求める争いは普通だった。

エアールは異形を憎み、セトラはエアールの豊かさを憎んだ。

その両国どちらの歴史にも記されている、革命者とも呼ばれる者がそれが断罪者である。

いつ書かれたかも分からない歴史書によると、

「断罪者：彼の者、現われし時には金色の光を伴う。白き国と黒き国、双方の力を受け継ぐ革命者は、過去に互いの犯した罪を浄化し、世の災いを消し去るだろう」と記されている。

解読不能な言葉もあるが、【白き国】はエアール、【黒き国】はセトラを指しているというのは誰でも知っている。【双方の力】と【互いの犯した罪】はまだ分かっていないが、革命者、という言葉は読んだ誰もが納得した。それほど両国の仲は悪かった。

そうして、互いの犯した罪を理解できぬまま今に至っている。

第九話・直感（前書き）

ここからラカ中心の視点じゃなくなります

第九話・直感

「証拠は？」

後の二人は何も言わない。

「証拠はあるんですか？」

ラカの声は震えている。もしかしたら知り合いかも、という期待が音を立てて崩れていく。

イスターは黙って前髪を掻き分けた。オイサイリアが辛そうにイスターを見る。

彼の額には目の様な印があつた。書いてあるわけでも、本物の目になつてゐる訳でもない。ただ単に『ある』のだ。

「これは…」

「エアーの大神官の子孫のみに受け継がれる【引導者の証】です」

「エアーの、ですか…」

がっかりしたようなラカに、イスターが慰めの言葉をかけた。

「まあ、何だ。【引導者】なんて偉ぶった言いかたしててもしよせんは服にしみが付いてるようなもんだ。たいしたこと無いよ」

絶対に自分の言つてゐることの意味が分かつていない。

オイサイリアは、今更ながらこいつ馬鹿だ、という顔で弟を見た。ラカは、状況が良く分からずポカンとしている。

そして、オイサイリアが文句を言おうとした時、ふいに誰かの腹が鳴つた。その音にラカが我に返つた。

「何の御もてなしもできずにすいません。今夕飯を作りますから、その話は食べながらでどうですか？」聞いているというのに返事も待たずに隣の部屋へ行こうとした。

「そちらはよろしいのですか？」

「やつた〜。青のり入りで頼むぞ〜」

イスターとオイサイリアが同時に言つた。

ラカはにっこりと笑う。

「ええ、あなた方を引き止めたのは私の事情ですし」言葉を切つて指を立てる。

「料理をするの好きなんです」

オイサイリアがそれに答えて微笑んだ。

ラカが行ってしまった後、姉弟の話が始まった。

「どうしたんだ、イスター。今日はやけに口数が少ないじゃないか」

弟は考えながら答える。

「うん。なんか、嫌な感じがするんだ。何か大切なことを忘れているような」

そう。二人は忘れていた。こういう場面の決定的なオチを。

「まあ、気のせいだよな」

「うん。まさか」

「それはそうと、魔眼まがんのことどうやって話そうか…」

「何か、変な匂いがする…」

それに最初に気付いたのは鼻と耳の良いオイサイリアだった。

「あと、ガリガリっていう不自然な音も…」

その時だった。

「できましたよ」

と言うラカの声。

「まさか…」

イスターにもそれが分かったらしかった。

ラカが持ってきたものは、この世にあるまじきナニか、いやもしかするとあつたかもしれないような黒っぽいもので、それを見たイスターが犬を飼っているのかと聞いた。大真面目に。

「飼ってないですよ？」

「じゃあ、それ何？」

「クリームシチューですが」

ラカの顔色を見るからには、自分が人間の食べ物を作ったと信じて疑わない様子だった。後二人の顔が青いものにも関わらず。

嫌悪感丸出しのオイサイリアは、よく見るとこれは猫の食べ物ぐらいには見えるかもしれない、と必死に現実から逃げていた。彼女にとっては猫の方がはるかに貴族的な動物に思えたのだ。もう一方のイスターは『これを食べないと親父の靴下を履かなければいけない』と自己暗示をかけようとしていた。

「あゝ？」

「は、はい。犬の餌でも食べて見せます。親父のかつらと靴下だけはやめてください！」

思わず声に出してしまったイスター。ラカの顔が落ち込んでいた。「気に入りませんか？」

その顔があまりに無罪潔白、という表情を浮かべていたため、イスターは黙り込んでしまった。

「それじゃ、ご飯にしましょう」

側で見ていたオイサイリアはなんだか間抜けな笑みを浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1458d/>

オイスターソース

2010年10月15日03時38分発行